7月31日（水）～8月20日（火）
表敬訪問

8月18日（日）
報告会

「改めて日本について知らないことがたくさんあると分かったので、まずは日本が今どういう状態なのか政治や教育などについて考えていきたい。」
田代　佳鈴

「広い視野を持った人になったかはまだ分からないが、それは私自身の行動にかかっていると思う。このスタディツアーを通して、自分の進みたい道、進むべき道が明らかになった。せっかく持てた夢を台無しにしないよう、私にできる精一杯の努力をしたい。」
岩重　優奈

「言葉は通じなくても伝えようとする強い気持ちがあればコミュニケーションはとれること、便利なものが無くても幸せに暮らせること、便利なものを求めすぎている私達はとどまるべきであることを強く思った。団員達や村の人々出会いに感謝しようと思う。」
前薗　真鈴

団員が感じたこと

カンボジア・ゴミに隠れた事実

鹿児島純心女子高等学校３年
六反田　基世

私は去年，体験事業でスリランカに行った先輩の卒業式での答辞を聞いて鳥肌がたった。自分が知らない世界がこんなにあるのかと驚き，私も知りたいと興味が沸いた。カンボジアへ行く前に先輩は私に「人生変わるよ。」と言ったが，その時はその言葉の意味が全く理解できなかった。帰ってきた今，私は来年行く人に同じことを思わず言ってしまうだろう。

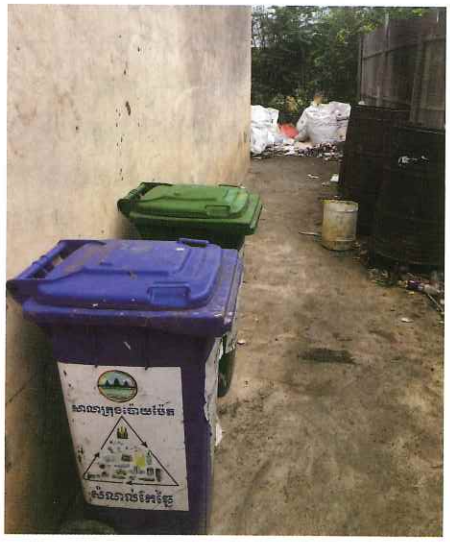
まず，私がカンボジアに着いてバスの中からの景色で目に付いたものは，街中にゴミが散乱している風景だ。街の至る所にゴミが落ちていた。なぜゴミを集めないのだろう，なぜ処理をしないのだろうと，様々な疑問をもった。

疑問が解けたのは，四日目に訪れたサマキーミンチェイ小学校での出来事がきっかけだ。この小学校は，以前は地雷区域にあり，裕福な人は住みたがらないアメリカのスラムのような地域だった。しかし，寄付などにより整備が進み，今では人気の小学校となった。実際に自分も訪れたが，とても綺麗な小学校という印象をもった。しかし，裏に回ると，そこには大量のゴミが散乱していた。私はこの差に戸惑いを隠せなかった。ふと横をみるとゴミ箱が二つ並んでいた。中を見てみると，ゴミ箱の中身は空だった。生徒に「これは何？」と聞くと「わからない。」と首を振り，傾げていた。彼らはゴミ箱という存在を知らないのだと思った。その理由は国民的習慣に表れていると感じた。

カンボジアでは，ポイ捨てが当たり前とされ，日常茶飯事に行われている。また，ゴミを処理する施設を建設･運営する為には多額の資金が必要となるため，ゴミは問題視されているが対策がほとんど取られていないのが現状だ。それだけではない。カンボジアでは対策がほとんど取られていない為，ゴミを燃やす。プラスチックやポリ容器など有害物質が出るのもお構い無しだ。このままでは数十年後には，カンボジアの生活や環境は修復不可能な状態になってしまう。

私は，大学でカンボジアのゴミ問題について４年間研究したいと考えている。多くの愛に触れ，また温かい優しさで包み込んでくれたカンボジア。私は，そんなカンボジアが大好きだ。村での生活を通して，「優しさは言語を超える」と思った。それくらい，村人全員が優しく，家族のように接してくれた。私は，村での生活が楽しくて仕方なかった。こんな経験をさせてくれたカンボジアに，私が研究したことを少しでも役に立たせ，恩返しすることができたら嬉しい。

行く前までは，こんなに別れが辛くて大泣し，腹筋が割れるかと錯覚するほど大笑いするとは思いもしなかった。また，自分自身と向き合い悩む経験をしたことは，人生の大きな第一歩となるだろう。私にとってカンボジアの思い出や共に過ごしたメンバーとの出会いは宝物だ。



小学校の裏側の様子（手前：ゴミ箱／奥：ゴミ）

村でのお別れ会　本人：前列左から２番目

団員が感じたこと

カンボジアで見つけた幸せの在り方

鹿児島中央高等学校２年
前薗　真鈴

外国へ行くこと。これは私にとって，初めての貴重な体験となった。

鹿児島空港を出発し，約４０００㎞離れたカンボジアに着いた。私はとても心が躍っていた。しかし，私にとってタトラヴ村でのホームステイは，楽しみではあったが不安な気持ちの方が大きかった。

二日目，私たちはバスに乗り，タトラヴ村へと向かった。バスが村に到着した時，笑顔で私たちを待ってくれていたタトラヴ村の方々の姿があった。ホストファミリーと対面する時，私のホストマザーは私の手を握ってくれた。また私がホストファミリーの家に着いた時，家にいたホストブラザー，ホストシスターが笑顔で迎えてくれた。私は優しさを感じとても嬉しかった。しかし，村に着いたその夜，私は衝撃を受けた。それは，トイレと水浴びである。トイレは桶から水を汲み，その水で流した。日本ではトイレはレバーをひねれば水が流れる。また，水浴びは桶にある水で髪の毛や体を洗った。日本との違いを感じる出来事だった。しかし，私の不安な気持ちや緊張は，ホストファミリーと過ごしていくうちにだんだんと無くなっていった。私のホストファミリーの中に４才になったばかりのホストシスターがいた。そのホストシスターは，会った時からずっと私について来てくれて，私たちはたくさん遊んだ。言葉はあまり通じなかったけれど，心は通じ合えて本当に嬉しかった。初日は少し辛かった水浴びやトイレも，二日目から徐々に慣れて当たり前のようになった。私が一番嬉しかったのは，三日目に私のホストシスターのお姉さんが家に来た時，お姉さんが指差し会話帳で「妹」という文字を指して「あなたは私たちの妹だよ」と言ってくれたことだ。私を家族として迎えてくれているということが感じられて，とても嬉しかった。言語の壁を超えて楽しい時間を共有することができ，幸せだった。私は，「タトラヴ村のことが本当に大好きになったのだな。」と強く思った。

私は，このホームステイの四日間を通して「幸せ」について改めて考えさせられた。今までの私の生活は，テレビやお風呂，クーラーがある生活が当たり前だった。しかし，村には日本では当たり前にあるものが無かった。それでも私が過ごした村での四日間は，日本にいるときよりもとても楽しく，充実していて，幸せを感じることができた。村の人たちも同様に，毎日笑顔で幸せに暮らしていた。発展途上国は大変な国だと思う人が，まだ周りには多くいるのではないかと思う。私は，幸せには様々なカタチがあって「便利な物が多いから幸せだ」という考えは違うのだということを多くの人に伝えたい。また，今の私には学校に行って勉強をしたり，部活動をしたりできる環境が目の前にある。この環境がある日本に生まれてきた私だからこそ，一生懸命勉強し，将来カンボジアに恩返しがしたい。今回，私はカンボジアへ行き，貴重な体験ができて本当に良かったと思う。最後に，私にカンボジアへ行く機会を与えてくださった多くの方々，そして一緒に活動してくれた団員に感謝したい。オークン（ありがとう）。

ホストファミリーと一緒に　本人：中央

ホストシスターと一緒に　本人：右

私にできることとは

鹿児島玉龍中学校３年
岡田　綾香

「この小学校は水道があるのでまだ恵まれています。」オーオンバル小学校で，現地在住の青年海外協力隊深町隊員がおっしゃった言葉だ。蛇口をひねれば水が出ることは当たり前ではないと，知識として分かっていた。日本の学校には水道がある。水道点検の時には，水が使えないことに不満を言う。それがどれだけ贅沢なことかと思った。

現地滞在中に雨が降った日があった。舗装されていない道路は水浸しになっていた。バイクや自転車はぬかるんだ道でもスピードを出して走っていく。事故があったのか，横転したバイクもあった。大きな道路はへこんでいる場所がところどころあった。内乱が終わり，日本を含め，たくさんの国がカンボジアに支援を行った。横断歩道や信号機も設置されている。しかし，横断歩道は消えかかっていた。「横断歩道は人が安全に道路を渡るためのもの」というルールが浸透していないという。私たちも車道を横断した。カンボジアで教わった「支援は細く，長く現地に順応して続けなければいけない」という言葉に納得した。モノの支援も必要な時もある。それと同時に，技術，ルールも伝えなければ自立できないのではないだろうか。相手国のことを考えなければ双方にとって負担になると思った。

私がカンボジアに興味を持ったきっかけは，学校での社会の時間にトンレサップ湖という湖について聞いたことだ。雨季と乾季で湖の面積が 10 倍以上変わるという。そこには，水深に合わせて丈が変わる稲がある。訪問時の７月は現地の雨季にあたる。例年では雨が降り，田んぼには水が張っていると言われ，楽しみにしていた。しかし，実際にバスの中から見た風景は，想像していたどんな状況でもなく，水がなかった。稲は少し枯れかかっていた。雨季が１カ月以上遅れているそうだ。「もし米が取れなければ農家の収入がなくなる」と聞いた。

また，ホストファミリーの家に隣接している生活用水のため池について，「去年は真ん中まで水が溜まっていた」とホストマザーが教えてくれた。しかし，水は４分の１もなかった。異常気象で気候が変わっていることをカンボジアに行って初めて実感した。日本よりも自然と共存しているため影響を受けやすい。協力することは場所や産業によって変えていくべきだと考えた。

私は今まで，カンボジアを東南アジアの国の一つとしてとらえていた。今回の研修に参加しなければ，身近に感じることもなかっただろう。現地でもたくさんの発見と交流があった。言葉や文化が違っても家族のように接してくださったことは忘れない。必死にカンボジア語を教えてくれたホストシスターは，言葉が通じずに涙を流しそうだった。私も悔しくて泣きそうになった。私が知らない場所にも人が住んでいて，家庭があると痛感した四日間だった。

帰国してから，私にできることは何かと考えている。進路について新たに模索中だ。このような機会を与えてくださったすべての方々に感謝する。将来を迷える環境にいることを幸せに思いつつ，自分にできることは何か考え続けたい。

ホストファミリーと近所の方

小学校運動会にて　本人：中央奥

団員が感じたこと

感無量のカンボジア

鹿屋高等学校２年
渡邉　望未

「チョンムリアップスオ」
私が初めて覚えたクメール語だ。早くカンボジアに行って話したいと毎日ＣＤを聞いた。

ステイ先に着き，荷物を置いた。早速話しかけられたが，ホストマザーが何を言っているのかわからない。ホストシスターは恥ずかしがって目も合わせてくれない。「四日間ここで生活できるのだろうか」と大きなため息が出てしまった。

二日目，指さし会話帳を使いながら，どうにか洗濯をしたいとホストマザーに伝え道具を準備してもらったが，手洗いは初めてだった。ホストマザーも心配だったのか手伝ってくれた。それからは，指さし会話帳やジェスチャーを使ってコミュニケーションがとれるようになった。ホストシスターとも仲良くなりたくて，折り紙でくす玉作りをした。一から作るのは大変なので，日本で折った 12 個のパーツを組み立てて見せた。時間はかかったが，ホストシスターはずっと横で待っていてくれた。完成を一緒に喜び，笑顔で受け取ってくれた。言葉は通じなくても，私の一生懸命さは伝わったと思った。その後，折り紙や縄跳びで一緒に仲良く遊ぶことができた。

村を離れる前の晩，ホストマザーから「アンボック」という米菓子をもらった。それは隣のおばあちゃんにもらって食べたものだった。私が「おいしい。」と言っていたのを覚えていたのだと胸がいっぱいになった。日本の家族にも食べさせようと思い，大事にリュックに入れた。バスに乗る前，家に大切に飾ってあった結婚式の写真をホストマザーから渡された。何と言っているかわからないけれど，ホストマザーの涙を浮かべた顔を見て「これを見て私たちのことを忘れないでね」という気持ちが伝わった。

私はホストファミリーや村の人が，訪問する先々で温かく歓迎してくれたことがうれしかった。今度は自分が日本に来る外国人留学生や技能実習生などのサポートをしたいと思った。そのために英語以外の外国語も学びたいと考えるようになった。

私はカンボジアを知りたい，自分の視野を広げたいという理由で応募した。実際に観たアンコールワットはすばらしかった。トゥールスレン博物館で悲惨な歴史を知った。おびただしい頭蓋骨に恐怖しかなかった。帰国してから世界史の教科書を見たが，欄外に数行書かれているだけだった。実際に行き，見ること，知ることができてよかった，と思った。

たったの一週間だったが，団員のみんなとたくさん話し，刺激を受けた。青年海外協力隊の方から様々なことを学んだ。自分の意見や目標を持っていて格好よく思えた。

17 年間生きてきた中で一番充実し，たくさん泣いて笑った一週間だった。生涯忘れない体験ができた。私がカンボジアに行くにあたって支えてくれた方々に感謝します。「オークン！」

ホストファミリーと　本人：左から２番目

アンコールワットにて　本人：右

私がカンボジアで感じたこと

川辺高等学校３年
下山　千晴

私がこの事業に応募した理由は，将来の夢が幼児教育の仕事に就くことだからです。グローバル化に伴い，子どもたちはより他者を認め，尊重する態度を持たなければならないでしょう。子どもたちの多様性を活かした教育をするためには，まずは自分自身が外国へ行き，異文化を受け入れる寛容な態度を身につける必要があると思い，応募を決めました。

私は，この研修を通して大きく二つのことを感じ，学ぶことが出来ました。

一つ目は「便利＝幸せ」では無いということです。村でのホームステイは日本の生活とかなり違っていました。水洗式ではないトイレ，透明ではない水を浴びるお風呂，クーラーのない生活。慣れない生活に，初日は心が折れそうになりました。それと同時に「日本は便利だから幸せだな」と感じていました。でも，村での生活が幸せではなかったかと言うと，そうではありませんでした。ホストファミリーは本当の家族のように私を受け入れてくれ，村の人は手を振ったり挨拶を笑顔で返してくれたりしました。優しく，温かく接してくれたおかげで，とても充実した日々を過ごすことが出来ました。最後は村とのお別れが嫌だったほどです。

二つ目は，小中学校を訪れたり，村の子どもたちと一緒に遊んだりした時に感じたことです。学校に行きたくても行けない子ども，学校のトイレや校庭が整備されていないことなどがとても目立ちました。それに比べて日本ではみんなが学校に行けるし，学校の設備も整っていてとても良い環境があります。でもカンボジアの方が良いところもあると私は感じました。例えば，クーラーのない生活をしているため，日本の子どもたちに比べて暑さに強く，体力があるように感じました。発展のし過ぎもあまり良くないのではないかなと思うようにもなりました。

また，ホストシスターと友達に折り鶴の折り方を教えたり，村の子どもたちと縄跳びや「だるまさんがころんだ」をしたりしました。私が先にやってみるとみんな集中してやり方を見ていて，やりたい!!と積極的に挑戦する子どもも沢山いました。日本語にも興味を持って真似をしたり，私にクメール語を教えてくれたりしました。これはカンボジアの国民性で，朗らかで温和な人が多いため自然と影響されているのではないかと思います。逆に日本は発展すればするほど忙しくなって，相手を気遣う心が少なくなっているように感じます。

この研修を通して，勝手にイメージするより実際に肌で体験することの大切さや，恵まれた環境で生活していることを当たり前に思い，感謝することを忘れていたことや，無駄遣いの多さを改めて感じました。しっかりと自分の生活を見直していきたいと思います。

この事業への参加のために協力してくださった多くの方に本当に感謝しています。この体験は私の宝物です。本当にありがとうございました。

ホストシスターと友達との折り紙あそび　本人：後列左

おじいちゃん，おばあちゃんと　本人：中央

団員が感じたこと

人々の温かさに触れて

神村学園高等部１年
田中　いぶき

私は，このカンボジア研修で沢山の経験をすることができました。

仁川で飛行機を乗り換え，プノンペンに着いた時最初に思ったことは「え，普通に都会じゃん。本当に発展途上国なの？」ということです。これは誰もが感じていたようで，皆が口にしていました。

その日は立派なホテルでこれからのホームステイに向けて準備をし，ホストファミリーとの生活や小学校への訪問に心を躍らせていました。

そしていよいよタトラヴ村に到着。ホストマザーが笑顔で出迎えてくれました。楽しみだったけれど，不安も沢山あったので，村の人たちの嬉しそうなニコニコした笑顔を見てすごく安心しました。日本では見たことのない初めての風景ばかり。道端に寝転がっている牛や犬，舗装されていない赤土の道，道の先に広がる広大な大草原，高床式の家，店ひとつ無い静かな村，どれもこれもが新鮮すぎて，現実味がありませんでした。

驚いたのはこれだけではありませんでした。ホストマザーにジェスチャーでお風呂に入りなさいと言われ，家の裏の牛小屋のすぐ近くにある小屋のようなところに連れていかれました。思わず，「えっ。」と声をあげてしまいました。なぜなら「これで水を浴びなさい。」と言われた方に目を向けると，濁った水に虫が浮いていたからです。トイレは日本の和式トイレよりも小さく，水は日本のようにレバーを押して流すのではなく自分で貯めてある水を流すようになっていました。便利な生活を知っている私たちにとって，事前研修で聞いていたとはいえ，やっぱり現実として目の前に現れると動揺を隠せませんでした。しかし，会長が出発前に私たちに笑顔でおっしゃった「カンボジアの文化を全て受け入れ，カンボジアを楽しんできてください。」という言葉を思い出し，「その通りだな，こんな経験，二度と出来ないかもしれない。」と思い，初めての水浴びを楽しむことが出来ました。

水浴びに関してすごく印象に残っていることがあります。それは，スコールで土がぬかるんでいた日のことです。水浴びが終わり，家に戻ろうと地面を踏んだ途端，土が柔らかくなっていたせいでせっかくのお風呂上がりなのに足が土まみれになってしまいました。足を洗いたいけれど水はその小屋にしかないので，戻るに戻れなかったことが忘れられません。こんな生活をずっとしていたのかと思うと，日本はどれだけ恵まれていて，どれだけ裕福な生活を送っているのかということを改めて身にしみて感じました。

本当にあっという間だった四日間のホームステイ，別れがこんなに辛いと思ったのは初めてです。日本に比べたらずっと不便かもしれない，だけど皆とても幸せそうでした。

カンボジア研修を通して，人の温かさ，優しさ，幸せの形の在り方，また，まだまだ残っている課題などを沢山感じることができました。この経験を活かし，自分の夢である技術者となってまたカンボジアに貢献できたらいいなと思います。一生忘れることのできない，素晴らしい経験になりました。

ホストファミリーと　本人：前列左から２番目

村の道路

カンボジアで感じたこと

クラーク記念国際高等学校３年
田代　佳鈴

私がカンボジアで感じたことは，みんな温かく，家族をとても大切にしているということです。村に着いた初日，ファミリーが何かを一生懸命伝えようとしてくれているのは分かるのですが，どうしても意味が分からず，とてもやるせなく思っていました。しかし，それでもファミリーが，ずっとにこにこしながら，今度はジェスチャーも使ってどうにか伝えようとしてくれていることがとても嬉しくて，私も同じくらいの気持ちでぶつかろうと思いました。

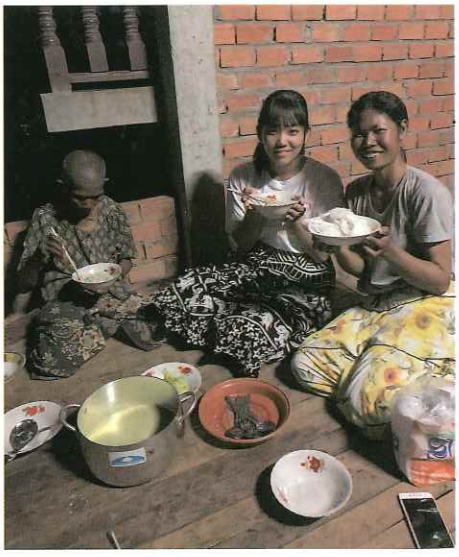
私のステイ先では，夜ご飯は絶対に家族が全員揃ってから食べていて，食べ終わった後もみんなでそのまま一緒にテレビを観たり話をしたりしていました。親戚も近くに住んでいるので，毎日いろんな人が集まって来て，とても賑やかな時間を過ごしました。その時間に，お土産として持っていったカレンダーを使って日本について教えたり，ファミリーたちのスマートフォンを使ってクメール語を教わったり日本語を教えたりしました。上手く言葉が話せなくても，笑う人も馬鹿にする人もなく，むしろ教えてくれたり，上手く言えた時にはたくさん褒めてくれたりしたので，一緒に会話をとても楽しむことができました。私は村のことがとても好きになりました。

四日間のホームステイ中に現地の小学校に視察に行った際，三つの小学校で青年海外協力隊として勤務している深町菜摘隊員から聞いた話の中に，「先生達が定時で帰るときの理由のほとんどが家族関係」というものがありました。奥さんや子どもが風邪を引いたら，その風邪の程度に関わらずみんなすぐに帰るそうです。日本ではよく思われないことが，カンボジアでは当たり前に受け入れられている，この差は何だろうと思いました。また，先生が自分の子供を学校に連れてくることがあるそうで，その時には生徒が面倒をみてくれたり，年配の先生が子育てのいろんなことを教えてくれたりするとのことで，みんな基本的に「家族が一番，仕事は二番」とおっしゃっていました。深町隊員は，カンボジアのそういったところは良い所だと思うとおっしゃっていて，私もそれはとても素敵なことだと思いました。

村とのお別れの日，もうすでに大好きになっていたファミリーとの別れはとても寂しく，できるならばまだ帰りたくない気持ちでいっぱいでした。しかし，そう思えるのも全てあの素敵なファミリーと過ごせたからです。本当に心から感謝しかありません。

この四日間のホームステイを通して，知らなかったカンボジアならではの良さを知ることができ，また，日本から出ることで改めて，日本についてもっと知ろうと思うことができました。今の私にできることは，カンボジアで見つけた良さをどんどん外に発信していくことだと思います。この経験を無駄にしないようこれからも行動を続けたいと思います。そしていつかまた，どんな形でもカンボジアへ行きたいと思います。

集まってきた親戚と知人　本人：左から２番目



家族との晩ご飯　本人：中央

団員が感じたこと

本当の幸せとは

舞鶴中学校３年
鳥居　彩乃

みなさんは，カンボジアと聞いて何を思い浮かべるであろうか。おそらく多くの人は，発展途上国やら，アンコールワットやらを思い浮かべるだろう。私も今回の派遣事業に応募する前までは，そのうちの一人であったと思う。

「青年海外協力隊の活動視察・ホームステイ・農村での交流」学校で配布されたプリントを見て，この体験は私を大きく変えてくれるだろうと思い応募をした。自分自身，海外でのホームステイは初めてではなかったため，初めはあまり心配や不安はなかったが，派遣が決まり，カンボジアについて調べたりカンボジアに詳しい先生に話を伺ったりする中で，本当に私が乗り越えらえるのかと急に不安になった。しかし，第一回研修，第二回研修で一緒に８日間を乗り越える仲間とクメール語を勉強し，お互い課題研究を発表することで，絆が深まり楽しみという気持ちが不安に勝っていった。カンボジアに着いて，直ぐにバスに乗り込んでプノンペン市内を走り，宿泊先へ向かった。その間に日本では有り得ない光景を目の当たりにした。町中に数えきれないほどのごみがそこら中に捨てられているのだ。そんな驚きから始まったカンボジア派遣。そこから私は今の生活の有難さを実感することになる。

首都から私たちがホームステイする村までバスで移動した。バスから見える景色の変化は著しかった。村に近づくにつれ，道が整っていない場所も多くあり，改めて発展途上国ということを感じさせられた。村に着いてまず嬉しかったことは，私のホストマザーがまだ写真しか見たことはないであろうに，私を見て笑顔で手を振ってくれたことだ。そしてホームステイが始まった。私のホストファミリーは，私にまるで家族のように接してくれる。言葉が通じなくても困っていたら助けてくれたり，私がクメール語で伝えるときに最後まで何も言わずに言い終わるのを待っていてくれたり，本当に私は村にいる間ずっと幸せだった。その時点で「幸せ」の基準が自分自身間違っていることに気づいた。日本にいたときは，食べたいと思うものを食べることができる，生活しやすい環境で生活できる，必要なものはすぐ手に入る。そんな生活が「幸せ」だと思っていた。しかし，村の人はみんなと一緒にいられる，笑っていられるだけで幸せだと思っていた。私も村の人と一緒に生活をしていると，幸せだと思うことが日本にいるときよりも多くなった。それは，やはり昔の自分が持っていた基準の間違いに気づいたからだろう。すると今度は日本の生活の有難さも見えてきた。村ではシャワーがないため水浴びをする。私たちが視察した学校は，ゴミだらけで衛生的にも良いとは言い難かった。そう考えると私たちの生活環境はどれだけ有り難いことだろうか。

様々なことを気づかせてくれて，優しさをいっぱい感じさせてくれたカンボジア。大好きになったカンボジアの将来，支えられるような仕事に就きたいと思った。オークン

現地の小学生と　本人：三列目右

ホストマザーと　本人：左

国際協力は受け入れることから

加世田高等学校３年
関田　伊織

鹿児島空港に着いたとき，積極的に動くことができたと満足していた。だが，研修中は必死にこなすことでいっぱいで，ゆっくり考えるということまではできていなかった。まずは反省から書こうと思う。

六日目の夕食会。協力隊の井上隊員の話は帰国後に自分の行動を考えるヒントになった。井上隊員は「国際協力とは上から目線で助けに行くということでなく，互いに知り合って助け合うことである。すると互いに成長する。それが自分のためになる。そのために相手のことを受け入れなければならない。」とおっしゃった。「国際協力とは，現地の人の役に立つ支援をすることだ」という私の考えとは異なっていた。

井上隊員の言葉を聞いて，ホストファミリーとのやりとりを反省しなければいけないのだと気づいた。研修二日目，ホストファミリーのチョン・リーさんのお宅に着いたとき，もう外は暗くなり始めていた。夕食を食べ終えると，チョン・リーさんは私をトイレに案内し，トイレの横にある溜め水（用をたした後に流す水）で水浴びをしなさいとジェスチャーした。その水には虫が浮いていて，茶色く濁っているように見えた。「できれば浴びたくないな。」夕方には，現地の人々が外で水浴びをしていたので，私も外で水浴びをしたいとジェスチャーで伝えた。でも，何度もトイレでの水浴びを勧めてくる。とうとう私の希望が叶ったのだが，ホストファミリーの方が電灯を持ち，井戸水が冷たい時はお湯を加えてくれ，ファミリーに手間をかけさせることになってしまったのだと気がついた。トイレを使わせてあげるというのは，チョン・リーさんのおもてなしだったのだ。溜めてある水は冷たくなかっただろうし，個室で人目も気にせず，水浴びさせてあげようという心遣いだったのだろう。

私はこの出来事を忘れないでおこうと思う。将来，私は途上国の農業を支援したいと考えている。まずは相手を受け入れることから始めよう。

協力隊の深町隊員の言葉も印象に残っている。「カンボジアの道端にはごみが多い。そしてなんでも燃やしてしまう。先生も生徒も時間通りに授業に来ない。病院でも使った注射針をそのまま放置する。これらは学校で教えれば解決できることなのだ。」

人と比べないおおらかな心，それはカンボジア人の良いところであり，私も見習いたいと思う。時間を守って環境を整えるべきだというのは日本の価値観である。決して押し付けてはいけないが，相手を知ることで考えが変わるかもしれない。

人間は，知っているものの中からでしか物事を判断することはできないと言われている。だとするならば，カンボジア研修はこれからの私の考えの幅を大きく広げてくれたことだろう。

素晴らしい経験をさせてくださった皆さんへ。オークンチュナム。

お別れ会でホストファミリーと一緒に　本人：左

チョン・リーさんのお宅のトイレの写真